

学校番号	8	学 校 名	静岡県立沼津特別支援学校	校 長 名	青木 暁乃
------	---	-------	--------------	-------	-------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
安 全	人権に配慮した指導の徹底	・職員が、相手の人権を尊重した対応を日々心掛けている。 ・保護者が、児童生徒の人権が尊重されていると感じている。	人権尊重の視点からの細かな気づきや自身の振り返りから、本校職員の人権意識が高まっていることが言える。99%の保護者から「できている」との評価をいただいた。	A	教員からは、課題点に対しては、悪いことやマイナスの意見だけではなく、「～したい」という前向きな意見が多かった。人権教育年間計画や人権の手引きの活用など、方法を工夫し、啓発を継続する。
		・校内が整理整頓されている。	整理整頓が、児童生徒にとっての分かりやすさやユニバーサルデザインに通じるものであるという認識が根付いてきた。片付けについて、単に「場所がない」にとどまらず、不要物を捨てて有効活用できるスペースがある、という意見が複数みられている。もっと片づけるべきであるという評価が一定数見られている。	A	校内の整備が必要な箇所を把握し、大型ごみの廃棄について、速やかに廃棄できるように課で対応するなど継続して行う。
	命を守る、未然防止と緊急対応の、実践力の向上	・未然防止の観点から点検と対応が常に行われている。	未然防止の取組について、良い点を具体的に上げ、高い評価となっている。唯一のC評価も注意啓発の内容である。老朽化への不安と安全配慮への更なる要望はみられたが、保護者から一定の評価を得た。	A	職員が定期点検とそれに基づいた必要な対応ができていた。安全点検で指摘された校内の危険物、不要物の共有により再発防止策を検討できた。修繕については、継続して対応する。人数不足の際の行動のシュミレーションや救護室、クールダウン室の表示、搬入物一覧を写真等で掲示する等して充実させる。
専 門	教育的ニーズの的確な把握とそれに応える自立活動の実践	・職員と児童生徒は、発災、緊急時の対応を理解し、行動できる。	予告なし訓練の成果から、日ごろの訓練による成長が感じれ、訓練の評価の場ともなった。一方、児童の実態に応じた難しさを感じている声が上がっている。また、実践的に、さらに発展させた内容を望む声も出ている。	B	個々に応じた避難方法の想定とそれができるための指導の実施。
		・教員が、児童生徒の自立活動の目標と、今持っている力や得意なことを生かした達成方法を、保護者に丁寧に伝えている。	保護者アンケートで「そうである」78%、「ややそうである」22%という評価であった。	A	自立活動の教員研修と内容の検討の必要性があげられていたため、客観的なツールを活用した児童生徒の実態把握や専門家を招聘した自立活動学習会の更なる充実を図りたい。個別の指導計画の書式を見直し、どの場面で自立活動のどの項目をねらって学習するのか、分かりやすくする。
	つながりのある支援と指導の充実	・その時期にその授業を行う意義について、職員が語り合い、保護者に伝えている。（お便りも含む）	「その時期にその学習を行う意義について説明すること」が教員に定着してきた。保護者アンケートで、「そうである」72%、「ややそうである」28%という評価であった。	A	カリキュラムマネジメントの観点で年間学習計画の作成ができるように12年間のつながり検討会の充実を図ること、学部を超えた語り合いの時間を確保できるように教育課程を編成することで更に定着させる。
		・授業で、一人一台端末が活用されている。	7割の教員が活用されているとする一方、活用の仕方について反省する声も上がっている。また、保護者には活用状況が十分に伝わっていない。	B	活用が進んでいる一方、活用方法の検討とGIGAスクール構想の更なる推進が必要。

様式第3号

		・児童生徒が、遊びの指導、生活単元学習、作業学習を楽しみにし、願いを叶えようと夢中で取り組んでいる。	教員が、授業づくりに一定の手ごたえを得ており、児童生徒主体の、生活の核となる、夢中な取り組みができている点を自己評価できている。	A	今年度の成果をもとに、合わせた指導の授業づくりをさらに充実・発展させることができるよう研修計画を立てる。他分掌の取組を活かしながら計画することで、より効率的に研修を進めていけるようにする。
		・職員が、学んできたことをもとに次の学びを描き取り組んでいる。	教員が、研修機会が豊富にあることをよい環境であると感じており、主体的に学んでいた。一方、次の学びを描くという点については、課題がいくつか挙げられた。	B	業務精選の観点から校内研修の参加の仕方について、希望が悉皆か、選択の幅を広げるなどし、継続して研修機会を設けるようにする。
連携	自立と輝きに向けた協働の充実	・職員と保護者が、学校運営協議会からの具体的な支援を理解している。	職員への周知は行ってきたものの職員や保護者の一定数が分からないという状況である。	B	学校運営協議会の継続的な情報共有を行うとともに、地域への情報発信を更に行っていききたい。
		・ケース会議後今後の方針と役割分担が明確になり実践されている。	「そうである」「ややそうである」職員が93%で、ほぼ達成できたと考えられるが、保護者からは、情報不足の指摘があった。	B	学部の Co. を中心に、「ケース対応区分表」や日々の先生方とのやりとりから児童生徒の状況把握に努め、早期に介入していく。必要な情報を保護者にも伝えるようにする。
	つながりの精選と地域への貢献	・本校の様々な交流や活動が、インクルーシブの推進につながっていることを、職員が説明できる。	インクルーシブの推進につながっているものの「説明」ということにハードルを感じている職員が多い。	B	保護者は、交流等の活動がインクルーシブの推進につながっていることを学校から伝えられていると評価している。今年度同様、お便り等を通して保護者に交流活動の様子や意義を発信していく。
		・交流籍校交流の活動に、打合せで伝えた児童生徒の「得意な学び方」が生かされている。	打ち合わせで、「得意な学び方」について伝えることが定着し交流活動にも反映されるようになってきた。一方、生かされているという点においては、まだ不十分である。	B	今年度同様、担当者説明会で児童生徒の「得意な学び方」を生かした具体的な活動例を紹介したり、相手校との事前打ち合わせの重要性を積極的に呼びかけたりする。
		・地域貢献や地域資源を活用した学習に、児童生徒が意欲的に取り組んでいる。	地域の、地域資源を活用した学習のよさを職員が自覚でき、実践が充実してきている。	A	学習活動が充実し、地域貢献としての自覚も出てきたので、今後は更に本校についての情報発信も積極的に行う必要がある。
チーム	やりがいを持てる職場環境の充実	・教職員が研修で学んだ内容をチーム力の維持向上に役立っている。	アサーティブという言葉が浸透してきた一方「人による」という声も上がっている。	A	おおむね達成のため、昨年度実施の研修内容の継承が必要。
		・教職員の時間外勤務時間が上限を下回っている。	周りの先生方の声掛けや定時退勤日の実施、早く帰ろうとする意識が持ててきている。	B	業務分担に不公平感を感じている職員が一定数いるため、業務分担の定期的な見直しが必要である。
		・事務室への報告連絡相談が迅速に行われている。	概ね良好である。	A	更にコミュニケーションを取り、連携して業務を行っていききたい。
		・職員が可能な範囲での改善がなされたと感じている	1 割弱の職員が達成できていないと感じている。	A	施設整備と人的環境整備について、県への働きかけも含め、進める必要がある。特に、老朽化とバリアフリー化については、要望書に入れていただくなど、PTAとの協働も積極的に行っていききたい。